



「ムジナモを小岩菖蒲園に」

なかじま みなこ
中嶋 美南子

1942年(昭和17年)
江戸川区南小岩生まれ
南小岩在住



■ムジナモ発見の地

水中の虫を食べる食虫植物なんです。普通の植物のように酸素を発生させるという機能は変わらないのですが、根っこがないので、洪水にあうと流されて絶滅してしまうのです。明治23(1890)年に植物学者牧野富太郎博士が、伊予田村(現在の北小岩4丁目)の江戸川河川敷の沼地で発見し、形がムジナ(タヌキの別名)の尻尾に似ているから、ムジナモという名前をつけたそうです。けれど、発見地の江戸川河川敷でもすでに絶滅しています。現在は、埼玉県羽生市の宝蔵寺沼でいろいろ工夫して育てていますので、そこから分けてもらった株を栽培しています。

わたしとムジナモとの関わりは、教員になって何年か経った時に、ある中学校の先生がムジナモを大量に育てて、小学校に配布したことがあったころからでしょうか。そのころは栽培方法がはっきりしなくて2、3年で枯れてしまったと聞いていました。

平成16年にえどがわエコセンターができた時、何人かの有志がムジナモを育てようというので、羽生市にムジナモの株を分けてもらったのが始まりです。現在は江戸川ムジナモ保存会を立ち上げ、会員を募り、引き継いでいます。区民の方にも参加してもらおうと、江戸川区の広報で里親を募集しています。応募された方も約7割の方が毎年失敗されているのですが、皆さんこりずに頑張っています。わが家でもプラスチック容器を使って栽培しているんですよ。

北小岩の小岩菖蒲園の隅に「ムジナモ発見の地」という記念碑があります。菖蒲園まつりのときには、ムジナモを展示しています。



◆直径1cm位の白い花が咲いているムジナモ

■自然を取り戻す水辺の活動

「えどがわ・荒川市民会議」に参加しています。荒川沿いの2市7区で、荒川をどういう川にしたいか、市民の意見を聞くものです。それが10年以上続いていたんです。そこで練った構想の中で、ぜひ荒川で子どもを楽しく遊ばせたいという思いから、地元の方とも話し合っ一緒に「下平井水辺の楽校」を立ち上げました。荒川のJR総武線鉄橋下流の干潟です。荒川を掘る前の地名が「下平井」という名前だったので、その地名を残しました。

江戸川区にはたくさん川があるのに「川は危ないから行ってはいけません」という禁止の時代を経験してきました。荒川は100年ほど前に地域住民を水害から救うために作られた放水路です。川遊び、植物遊び、虫採りとかかに採り、しじみも採れるんですね。それでも、子どもが何人もおぼれて危ない目にあっているのが、自然のもので遊ぶという事も忘れられてきました。今でも危険だから川に行かせないという原則があるわけですが、川自体にはいろんな自然の遊び道具がたくさんあるでしょ。そこで子どもを自由に遊ばせて、とっぷり自然に浸らせてあげたいなあと下平井水辺の楽校を始めたんです。葦で作った葦笛とか、竹を切って水遊び。昔の子どもが経験した、遊び道具や電気がなくてもできる遊び、植物遊び、虫採りとか。川の中に子どもが入る時は、ライフジャケット(救命胴衣)を着せます。水の中に入っても浮くのでボートやなんかに乗る時にも必ず着ますね。安全第一です。

メンバーの中に投網が上手な方もいらして、荒川で投網を打って、小さな魚を捕まえてくれるんです。それを子どもたちが網からはずして遊んだりしています。「投網は3年生以上ね」という約束はしてあるんです。3年間待って、投網をやるようになった女の子もいます。採った生き物は、できるだけ元に戻してあげるということを基本にしています。

荒川はゴミが多いので、自分たちの遊び場所はきれいにしようということで、活動を始める前の10分でも、20分でもゴミ拾いはします。今一番困っているのは、発泡

スチロールの小さな粒々。それを魚が食べたら大変。あれはね、取れないんですよ、小さいし、軽いし。大きな箱の形をしている時は楽なんですけど、粒になると本当にお手上げ。南極まで流れ着いているそうです。

わたしのもう一つの活動。エコセンターの「樹と友達になろう」という観察会を年に2回開いているんです。木の名前とか、性質とか、木の役割とか、そういうのを理解してもらうものです。区内の親水公園とか一之江名主屋敷とか、篠崎公園でもやってますね。それから、葛西臨海公園、小岩公園とかも。江戸川区内は、ほとんど回って歩いたので、年に1回は区の外にも出ています。



◆下平井水辺の楽校

年目からは保育園に預けて仕事を続けました。

子どもがいじめられたことがあります。中学の時ですが、制服をぼろぼろに引き裂かれて帰ってきた時は、引き裂いた子どもの家を訪ねて、服を直すように迫ったことがあります。「あなたがやったんだから、あなたが直すように」と。これは親や先生が口を出すというのではなく、子ども自身にやったことがどういうことなのか、両方立ち直ってもらおうと思ってその子に話したんです。

平成2年には教頭(現在の副校長)として小学校に赴任しました。教頭時代、夫が山の事故で亡くなりました。平成15年に定年退職し、江戸川区教育委員会教育研究所に勤務。5年後には小学校に再び勤務。現在は小学校理科支援員として理科実験のアドバイザーをしています。

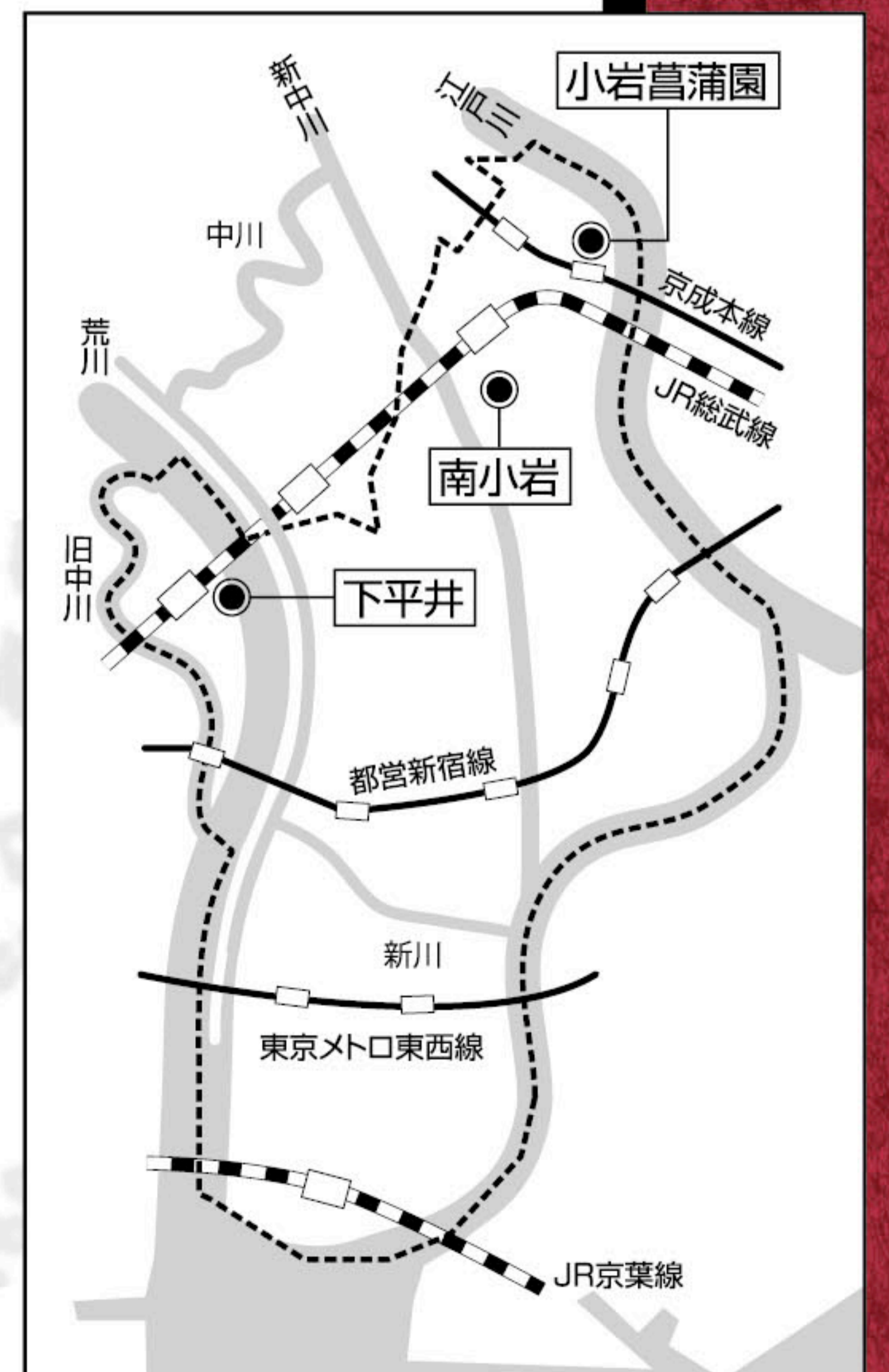
人間と自然との共生をめざして

江戸川区で生まれ、江戸川沿いで育った私は、江戸川区が好き。江戸川の風景が好きです。総武線で亀戸あたりから乗ってくると、江戸川区近辺の小さな街並みの緑が結構多いと感じますね。緑を大事にする区なんですけど、路地で落ち葉が落ちるからあの木を切ってくれとか、江戸川の花火大会の時はあの木があるから見えないので枝を切って欲しいとか。そういう声があるみたいで、残念ですね。

今私たちが考えなければならないのは、人間も自然の一部であるということです。人間も自然界の循環の中で生きることができればいいのですが、生物同士のつながりの中から人間だけが外れています。人間が何かに食べられるということはないでしょう。生物が食べて、また食べられてという生命の循環。自然界の輪の中で、人間は食べるだけ。

すでに絶滅してしまっている「ムジナモ」を、発見の地である現在の小岩菖蒲園にいつでもいるようにしたいと思っているんです。環境的には江戸川の水を引いていることと、それから水辺の植物としてはすごくいい場所なんで、牧野先生が発見した場所で、復活させたいですね。

生物多様化の世の中に対応しながら、生き物がお互いに助け合って生きていくことを、次世代にも繋いでいきたいと思っています。



理科好きの担任にあこがれて

生まれたのは昭和17年です。今は南小岩3丁目と表記も変わりましたが、生まれも育ちも小岩町です。生まれた時は戦争中で、私が生まれてすぐ父は出征してという時代でしたから、母が内職をしながら育てたそうです。女ばかり4人姉妹の長女です。

小さいころはとても身体が弱くて、祖母にこの子は6歳までうまく育たないんじゃないかって言われたくらいだったようです。そのころ流行った猩紅熱しょうこうねつにかかって、駒込あたりの病院に隔離されたこともあったようです。それが、小学校5、6年ごろからたくましくなりました。

大学を出て、小学校教諭になりました。小学校3年生の時の担任が理科好きの方で、その先生にあこがれたという事でしょうね。実験をしながら理科の授業をやるというのは、そのころたいへん珍しかったんです。できたらそういう先生になりたいなあと思ったの。

私が生物学に興味を持ったのは、中学生の時。夏休みの自由研究の植物採集とか、押し花作りから始まっていると思うのです。この植物の名前はなんだろうという単純な思いから付き合いが始まり、山登りをするようになってからは高山植物の美しさに惹かれていきました。

「山の会」で夫と知り合い、結婚したのは昭和44年。夫は設計技師、私は教員を続けました。昭和45年と昭和48年に男の子が生まれました。1年目は母に面倒を見てもらい、2